

リッセとロダの話

「——ほら、かわいくて美人な女の子に貢ぐと考えたら？」

「お、おう……………」

「……………そつ。どうせ私は猫草だよっ」

「まあ落ち着けよ。意味もわからん」

ようやくリッセがちよつかい出してこなくなったので、エイルの意識は思考の中に埋没していく。

「寝たね」

「そうだな」

「ごごと揺れる馬車の中、エイルは寝てしまった。

これから オウシンデインケルツ 黒皇狼 を狩りに行くところである。まだ夜が過ぎていないほどの早朝で、何もなければリッセも寝ている時間ではあるのだが。

それでも、馬車内に三人いて、同年代の片方が寝てしまうと、リッセの話し相手は必然的にロダだけとなってしまふ。

リッセとロダは、一見親しそうに接してはいるが、実はそこまで付き合いが長いわけではないし、親しくもしていない。

リッセがハイディーガへ移動する際に会い、数日ほど一緒に旅をした、くらいの仲である。その間に魔物を狩る姿を見せてもらったり、いろんな話をしたものの、あまり個人的な話はしていない。

これがいい機会と見るべきか、立場や役職を考えて軽はずみに質問するべきではないのか。

エイルという緩衝材がいるから、やや打ち解けた風にもできたが、いざ一対一となると、なんだか身構えてしまふ——

「ちよつと明るくなったか？」

「え？」

ロダの急な発言に、何事かとリッセは考える。

——明るい？ 空を見ればまだ余裕で真っ暗なのだが。

「君自身のことだよ、リッセ」

「え？」

発言の意図そのものを言われても、それでも何事かと思えないリッセである。

——自分が？ 明るい？ 明るくなった？

「あの、なんのこと？ よくわからないんだけど」

「お？ じゃあ無自覚か？」

意外そうなロダだが、その意外そうな顔をする理由もまだわかっていない。

「出会った時から見て、少し性格が明るくなったな、って思ってたな」
「そう言われても、それでもリッセにはピンと来ないのだが——」
「——あの時は冗談なんて一つも言わなかっただろ」
「そう指摘されて、ようやく心当たりが見つかった。」



リッセは、暗殺者を育成する施設で育った。
表向きは孤児院だったが、裏ではおよそ子供にさせるようなことではない、常軌を逸するような訓練ばかりが行われていた。

同年代の子供たちと一緒に学び、競い合い、リッセは常にトップの成績を残してきた。
実技面でも知識面でも、リッセと並ぶ者など一握りだった。

「あの……忘れてくれない？」

ロダが言っている「冗談なんて一つも言わなかった」というあの時とは、ほんの一月強、二ヶ月弱ほど前の話である。

そして、今あの時を振り返ると——ただただ恥ずかしいばかりの話である。

確かにあの時は、冗談でもそうじゃなくても、誰かに「お金くれ」なんて言えなかっただろう。
「明るくなったんじゃないくてさ、前は調子に乗ってただけだからさ……」

——リッセの育った施設は、ナスティアラ王国に点在する育成施設の中では、最も難易度が高くとされていた。

その施設でトップを走ってきたリッセは、いわゆるエリート中のエリートと言える。

そう、要するに、エリート意識が強かったのである。

そういう意味でエリートぶって調子に乗っていたのである。自分はエリートである、という自負もあったし、それを誇ってもいた、のだが。

「ふーん。調子になあ」

ロダはニヤニヤしている。

「別にそのまま乗っててもよかったんだぜ？」

「やめてよ。思い出すのも恥ずかしいんだから……」
今のリッセからすれば、ただただ汚点でしかない。

「いや、結構本気で言ってる」

じゃあニヤニヤするな。本気で言っている者の顔じゃないだろう。
だが本当に、ロダからすれば、リッセのエリート意識は邪魔ではなかったのだ。

その意識があったからこそ、周囲の模範となるべきという想いも強かった。何事も生真面目に打ち込む姿は、学ぶ側の姿勢としては理想的な優等生だとさえ思っていた。

まあ、真面目過ぎるとも思っていたが。

「やっぱりそのメガネの影響か？」

「……そうだね」

施設ではトップだったが、いざ施設から出て自由にできる時間が貰えたら——リッセは自分の無力を強く感じたのだ。

対人は強い。

様々な知識も身に付けた。

その二つは、施設でしつかり磨いてきた。そんじよそこらのベテラン冒険者にだって負けない自信がある。

ただ、それ以外が必要とされる場面が、非常に多かっただけだ。

——特に魔物狩りは、足りないものだらけだった。

——そしてすぐ隣に、自分に足りないものをたくさん持っている少年がいた。

最初こそ持ち前のエリート意識と負けん気で、なんとかエイルを見返してやりたい、なんなら実力差を見せつけて見下してやりたいと思っていたが……結局それは叶わなかった。

というか、それどころではなくなった、と言った方が正確かもしれない。

生活と訓練を、己の腕と能力と意志で両立させなければいけないとなった瞬間から、誰かと競争している場合じゃないという現実に気づいたのだ。

エリート意識ではお金を稼ぐことはできない。

身に付けた知識の中には、明日の生活費を得る方法なんてなかった。

施設では誰にも迷惑を掛けずしつかりやってきたつもりだったが、いざ野に放たれてみれば、いかに環境におんぶに抱っこされていたのか、嫌でも身に染みた。

——「何がエリートだ、どこがエリートだ」と思った瞬間が、リッセには確かにあったのだ。変わったと言うなら間違いなくその瞬間である。

そう——訓練の道が分かれ、エイルがソリチカを師と呼び出した後。

時間と体力に余裕ができたエイルが食事当番を担ってくれて、自分よりおいしい料理を作ってくれた時に。

思い知ったのだ。

——「何がエリートだ、思っている以上に実力が足りないぞ！」……と。

おまけに、薄々ではあるが、剣の腕と暗殺者方面の知識以外は、すべての要素でエイルに負けて

いるのではないかと気づき始めていた。

というか、十中八九負けているだろう。

しかも、彼は暗殺者を育てる施設から来たわけではない、という事実も付加すると……

——「エリートなんの役にも立たないな！」と思わずにはいらなかった。

思ってしまった以上、奢り高ぶれる理由なんて、欠片ほどもないじゃないか。

「良いか悪いかはわからないけど、気は軽くなったかな」

なんというか、もう誰にも舐められないよう肩肘張らなくてもいいかな、と。そんな思考が芽生えたのはいつだったか。気が付いたら自然とその事実を受け入れていたと思う。

だって自分は役に立たないエリートだから。

役に立たなくせに意識だけ高いなんて、ただただ滑稽でしかない。

持ち前の気の強さと負けず嫌いは性格上のアレなので残ってしまったが、エリート意識の方は、もうすっかり枯れ果てて萎びていると思う。

ロダは「そうか」と軽く頷く。

「まあ楽になったんならいいじゃないか。余裕がなくてカリカリしている女性は真綿のように優しく包み込んであげたくなるもんだが、一緒にいるなら穏やかな方がこっちも楽しんだしな」

「前より魅力的になったかな？」

「……………」

「なんでそこで黙るんだよ」

「ガキには興味ないからだ。リッセはまだ守備範囲外だな。五年後を楽しみにしてるぜ」

「おい。素直すぎない？」

リッセがそう言った瞬間だった。

「——俺の報酬って出るの？」

「あ、起きた」

寝ていたエイルが起きて、起きるなりそんな質問をするのだった。

なお、エイルは寝ておらず、考え事をしていただけである。

まあ話はまったく聞いていなかったが。